

2013 年度点検・評価シート

I 評価項目・担当部局

対象部局	環境創造学部環境創造学科 Faculty of Social- Human Environmentology
評価基準 4	教育内容・方法・成果
中項目 4-4	成果
点検・評価項目(1)	4-4-1 教育目標に沿った成果が上がっているか。
評価の視点	学生の学習成果を測定するための評価指標の開発とその適用
点検・評価項目(2)	4-4-2 学位授与（卒業・修了認定）は適切に行われているか。
評価の視点	学位授与基準、学位授与手続きの適切性

II 【点検・評価項目ごとの現状説明】

4-4-1	- ゼミ発表会を毎年実施してきた。入門ゼミから代表作を決め、代表者または共同研究者が、所定のレジュメを配布し、所定の時間内でプレゼンテーションを行う。内容、論理的思考、展開と効果、態度などが評価される。教員がそれぞれの専門性からコメントを述べる。 - それぞれの科目に関しては、シラバスに掲載する方法を用いて学習成果を測定、評価している。 - 卒業要件を充足した学生には、卒業と同時に卒業証書と学位「環境創造学士」が授与される。
4-4-2	必ず基準に充たさない限り卒業させない等、試験制度は適切に行われている。しかし、近年、学力の低下だけでなく、動機づけが希薄で、途中で簡単に諦めてしまい、留年、さらに退学に至るケースも散見される。教務委員会だけでなく、各教員はゼミ生への懇切丁寧な指導を心がけているが、次第にゼミにも欠席しがちな退学予備軍がいる状況に頭を悩ませてきた。

【効果が上がっている事項】

4-4-1	卒業生アンケート結果の分析によれば、学科で学んだ専門的知識や技術が身についたかという質問に対し、25.6%と 53.4%が肯定的に答えている。社会人・職業人としても必要な技能が同じような割合で身に付いたとしている。授業評価アンケートの結果を教員が教育の向上に役立てている。
4-4-2	- 卒業研究は、学部事務提出を 1 月末に定例化している。一定期間(1 カ月程度)閲覧期間を設けている。3 月には「卒業研究発表会」を催し、優秀な卒業研究を発表している。 - 教授会を通して、キャリア支援の方向性を示した。ゼミ毎にオフィスアワーを実施し、キャリアセンターとの連携で各種講座に出席できるようにした。

【改善すべき事項】

4-4-1	- 学生の基礎力と学習意欲を伸ばし、進学率をあげるために、本学部独自の初年次用テキストの開発が必要である。 「ライティングカフェ」の運営など学生の主体的な学びを支援する仕組みの成果を可視化する方法を検討。
4-4-2	学位授与基準、学位授与手続きの適切性について、「教育研究ワークショップ」「教務委員会」で精査し、教員のそれぞれの専門性が、学際的に活かされ、卒業研究の独創性・論理性に繋がっていることを確認する必要がある。

III 本項目の根拠資料（データ類、裏付けとなる資料）

教務委員会議事録。卒業式でのアンケート調査報告書。『FD 報告書 2013 年度』（大東文化大学ファカルティ・ディベロップメント委員会編）。授業評価アンケートの DVD『学生による授業評価と大学教育 2013 年度』。

【2014 年度からの達成目標】

【達成目標】 目標の進捗状況は、「S：完全に達成」「A：概ね達成」「B：やや不十分」「C：不十分」で、評価する。

達成目標		目標達成の指標となるもの	評価				
			2014	2015	2016	2017	2018
中期目標 (2014～ 2018)	教員間の問題意識を共有化し、卒論研究に向けての指導などと学生の学力評価について真剣に協議する時間が必要である。	進級率の数値の推移を詳細に分析する。 退学届のフォーマットはより詳細な理由を記載するようになったが、そこに至る以前に教員との密な相談システムとしてのオフィスアワーを活発にする。 ・学修ポートフォリオの導入	→				
	非常勤講師の努力・苦労も共有するために 1 年に一度の懇親会だけでなく、学部独自の教員ワークショップの時間をもちたいと考えている。	授業についていけない学生や経済的困窮からアルバイトで疲労している学生が、十分に活力を取り戻せるような学生の「居場所」をキャンパスに創造する。教員が学生を「管理」し「厳しく指導する」	→				

		といった体制ではなく、学生たちが自由な発想をもとに主体性を伸ばす「居場所」となるように見守る。						
14 年度 目標	就職率のさらなる向上のために努力する。		→					
	環境問題に関する資格取得率も検証する。		→					